

水稲 ツマグロヨコバイについて



図1 ツマグロヨコバイ (左：雄成虫、中：雌成虫、右：幼虫)



図2 萎縮病による葉のかすり症状



図3 萎縮病により萎縮した株

1 生態

ツマグロヨコバイ（成虫の体長は雄で4～5mm、雌で約6mm、体色は緑色で、雄の翅先は黒色、雌の翅先は薄い褐色。幼虫の形態は成虫に似るが翅をもたない。）はイネの害虫で、成幼虫がイネの養分を吸汁することにより被害を与えるほか、萎縮病やわい化病、黄萎病といったイネの病気を媒介する。

萎縮病は、イネがイネ萎縮病ウイルス (*rice dwarf virus*: RDV) に感染することで起きる病害で、感染したイネは、葉が濃緑色となり白い小斑点が葉脈に沿って縦に連続して生じ、かすり状となる。生育の初期に感染すると、株が萎縮して出穂しないほか、後期に感染すると出穂するが稔実不良となる。RDVを保毒したツマグロヨコバイが、幼虫の形態で越冬し、翌年の伝染源となる。

2 発生状況

ツマグロヨコバイは、イネ科雑草で越冬した4齢幼虫が成虫となる5月頃から、田植えに合わせて水田に飛来する。本県では年間4～5世代を経過し、8～9月の発生量が最も多くなる。水田内では世代が明瞭に分かれておらず、成虫と幼虫が混在している。

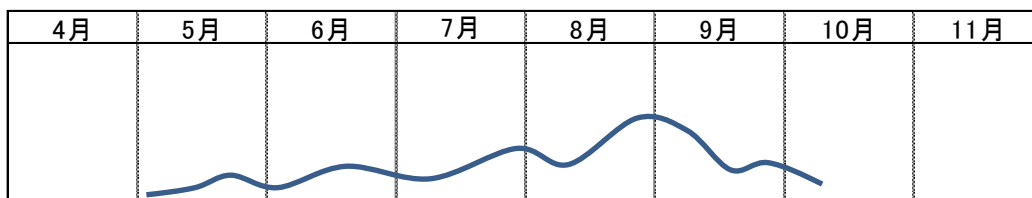


図3 ツマグロヨコバイ成虫の発生消長

3 防除対策

(1) 耕種的防除

本種は主に水田内外や雑草地のイネ科雑草において越冬することから、水田の秋起こしや周辺雑草の管理を行う。

(2) 薬剤による防除

箱施薬剤による防除と本田での防除を行う。萎縮病等の病害を防ぐためには、箱施薬や6～7月の本田防除を行う。穂への吸汁害を防ぐためには、出穂前後の幼虫期に防除を行うと効果が高い。このとき、水田内では成幼虫が混在しているため、幼虫の比率が7～8割と見られる時期に防除を行う。